

税が築く未来——万博から学んだこと——

大阪府立咲くやこの花中学校3年 大原 和花

2025年に大阪・関西万博が開催される。テーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」である。世界各国から技術やアイデア、文化が集まり、人類の未来について考える機会となるこの万博は、単なるイベントではなく、社会の未来像を具体的に示す重要な場である。この万博について調べる中で驚かされたのは、その規模の大きさと、そこに投入される公的資金の額である。会場整備、交通インフラの拡充、警備、スタッフの雇用、国際交流のための準備など、莫大な費用が必要とされる。これらの費用の一部は、国民から集められた税金によって支えられている。つまり、万博は私たち一人ひとりの税金が集まり、形になっている場でもあるのだ。

税金というと、「取られるもの」や「負担が大きいもの」といったイメージを持つ人も多い。実際、日常生活の中で「税の使い道」を意識する場面は少なく、税は見えにくい存在である。しかし、万博というプロジェクトを通して、税金本来の意味に気づかされた。

万博で紹介される最新技術の中には、私たちの暮らしを根本から変える可能性を持つものが多い。例えば、高齢化社会に対応した医療の進化、災害に強い都市づくり、誰もが使いやすいユニバーサルデザインの導入などである。これらは、すぐに成果が見えるものではないかもしれないが長期的に見れば社会全体を良くする可能性を秘めている。

万博に税金を使うことは、未来の社会づくりへの投資である。しかし、今の社会に求められているのは、短期的な視野ではなく、持続可能な未来を見据えた長期的な視野である。そして、それを現実に近づける力を持つのが税金という仕組みである。

税とは、社会の構成 全員が参加する責任の形である。教育、福祉、医療など、あらゆる分野で使われており、それによって私たちの生活は成り立っている。税金は、国民全体の共有財産であり、それをどう使うかは、私たちの未来をどう形づくるかという問題でもある。

将来、私は社会人として税を納める立場になる。そのとき、ただ義務として納めるのではなく、税金がどのようにして社会に役立っているかを考え、意見を持てる大人でありたい。

万博は未来を体験し、考えるための場所である。そして、それを支える税金は、国民が行う、未来に向けた「共同投資」であるということである。万博を通して税の意義を学んだ今、私は税を払うことは、未来を築くことだと考える。これからの社会を支える一人として、責任ある行動をとっていきたい。